

## 社会的評価基準の変化に対応した建設コンサルタントのあり方

日本データサービス株式会社	フェロー会員	五十嵐日出夫
札幌大学経済学部	正会員	鈴木聡士

「モノ」が溢れる成熟の時代は、豊かさを基盤とした心理学の時代である。貧しさを基盤として、その上に構築された経済理論に固執しようとする経済学独善の時代ではない。

もちろん、ここに言う心理学とは、フロイトによる古典的な精神分析学的体系ではなく、例えばマズローによる「人間性の心理学」（マズローの欲求5段階説によれば、人間の欲求は、段階かつ重層的に上昇して行くと反説する。すなわち、生理的欲求、安全の欲求、愛情の欲求、尊重の欲求、自己実現の欲求【一例を挙げれば『嗔』、『瞋』、『美』に対する欲求】へと5段階を経て重層的に上昇して行くとい反説。）など、いわゆる第三の心理学とも称せられる現代心理学の体系等である。

だから、政府が巨額の国債を発行して公共事業を実施し、日銀が紙幣を増刷して、どんなに「カネ」を世の中にだぶつかせようとも一向に景気はよくなるまい。特に高齢者のお金は、老後の安心のために、ほとんど無利子の銀行預金や郵便貯金と化して、金利の高い国外へと流出する。

何故か？ 技術が高度に発達して、身の回りに「モノ」が満ち溢れてはいても店頭にはかつての家電三種の神器を思い出させるほどに購買欲をそそる魅力的な「モノ」がないし、社会保障は不安定で老後の生活に暗い不安を感じるからである。

しかし、産地がはっきりし、販売経路も知られた安心なデリバリー商品、あるいは高齢者の気持ちを汲んだ商品や、健康に配慮した宅配弁当などは急成長している。少々高くは付くが、「安心」という現今の評価基準に合格するからであろう。

このようにわが国の社会は既に「安全」は言うに及ばず、それを越えた「安心」が求められる成熟の時代、そして感性の時代に入っているのである。だから、当然のことながら今日の建設コンサルタントも、この時代の社会的評価基準の変化を受容し、活動しなければ早晩に行き詰まるに違いない。

去年の3月、尊敬する(株)クマシロシステム設計の会長 神代方雅さんが鳥取大学・奥山育英教授のご指導の下で工学博士の学位を授与された。

本業の傍らではあるが50年近くの長い年月を学問研究に勉励されたご努力の結果である。お年齢は既に米寿を越えた方で、ご縁があって私もその審査員の一人に加えられた。

ある時、私は「神代さん！ 神代さんはもう既に八十八歳を越えるご高齢なのに、なぜこれまでにご苦労をなさって学位をお取りになるのですか？」とお尋ねした。神代さんいわく、「五十嵐先生、先生のお尋ねは無理もない。私は既に会社を起こし、息子も孫も皆、よく頑張ってくれて、社業もままずまずに進展している。また、幸いに健康にも恵まれているし、方々からの公職にも頼まれ、この年齢で大学の非常勤講師も依頼されるほどに充実した毎日を送っていて、さほど困ることはない。しかし、大学へ出かけるようになって若い学生達と接触するたびに、私ももう少し勉強して学位を取りたいと願うようになった。もし学位を取ったら、閻魔大王の前で私は申し上げます。私、神代方雅は、志を立てて頑張った。今、この期に及んで悔いることは無い」と。これはまさに、自己実現の境遇に近い。

ところで私は、いわゆる建設コンサルタントに3種類があると思っている。その一つ目は、(1)作業だけのコンサルタント、二つ目は、(2)仕事をするコンサルタント、そして三つ目は、(3)提案するコンサルタント、この三つである。

(1)の作業だけのコンサルタントは、顧客の指示に従って、とにかく作業はするが、それ以上ではない手足だけのコンサルタント。(2)の仕事をするコンサルタントは、顧客の事情にも配慮して、それなりの工夫を凝らすコンサルタントだ。これには作業の手足に加えて頭が加わる。

---

キーワード：社会的評価基準、「効率」・「公平」・「安心」、感性工学

連絡先：〒065-0016 札幌市東区北16条東19丁目1-14 TEL011-780-1111（代表）

そして(3)の提案するコンサルタントは、手足や頭に加えて顧客の置かれた事情、環境、情念にも配慮して仕事をする。そして顧客のために必要と考えられるならば、積極的に顧客にとって苦言の提案もする。さらに、顧客に有利と思われる適切な政策、ストラテジーをも提案する「提案コンサルタント」、「シンクタンク」である。

無論、この3種類の分類は厳密に分けられるものではなく、何れのコンサルタントにもそれぞれの性格が濃淡を持って重層的に混ざっているのは言うまでもない。

ところがこのレベルのコンサルタントになると、ただ単に狭い意味の技術だけでは十分とは言えない。社会はもとよ、生活・文化、さらには芸術にいたる広く該博な知識と経験に裏打ちされた技術、そしてそれを支える哲学が必要になる。

またその技術は、時流の「社会的評価基準」によって吟味されていなければならない。さもなければ、それが如何に努力した結果であろうとも「そんなもの要らない!」と、社会から受容されない恐れがあるからである。

では今日、私共に求められている「社会的評価基準」とは、如何なるものであるのか。

それは過去の基準と将来の基準との狭間にあり、一般的に既に安定したとは言いかねるものではあるが、最近ようやくその傾向が読み取れるようになってきた。

すなわち、その傾向とは、( )「将来展望がない狭い視野からの効率」、( )「平等」、( )「安全」から、(1)「将来展望がある広い視野からの効率」、(2)「公平」、(3)「安心」への穏やかな重心移動である。

「将来展望がない狭い視野からの効率」では、総てのプロジェクト等が、近視眼的に一律に目先のB/Cだけで評価されるが、「将来展望がある広い視野からの効率」では、目先のB/Cを越えて長期的な広い視野から評価されることになる。

「平等」は、結果を均等にしようとする。しかし、「公平」は、機会の均等を求めても結果の均等は求めない。適正な競争による結果を容認する。この基準からすれば、これまでの国土計画、地域開発計画等において掲げられていた「地域格差の解消」などは、もう安易一律に求めることはできない。北海道開発計画などでも、特殊事情を述べず、全国の他地域と対等な立場に立った競争と協調の下においてなされなければならなくなった。たとえ地域の特殊事情を挙げて特別な措置を求めても、その理由に説得力がなければ、相手にされない。

では、最後の「安全」から「安心」への変化。これは「安全」がどちらかと言えば物質的、物理学的感覚であるのに対して「安心」は物質的、物理学的感覚に加えて、精神的、心理学的感覚が強調され、その延長上に自己と他者、人間と環境(自然環境、社会環境)との関係が求められるようになる。自己の存在は他者、あるいは環境とのむすびつきの中に存在するからにほかならない。

近年、ここに新しい学問分野が台頭して来た。感性工学(Kansei Engineering)である。

では、この「感性」とは如何なるものであるか。桑子敏雄(感性の哲学、NHKブックス914)によると、「感性は、気候や風土を含む環境世界と自己の身体との相関を把握する能力ということができる。具体的にいえば、寒い日に薄着では風邪を引く恐れがあると感じる能力、もっと重ね着をすべきだとい判断を行う能力はこのような感性である。感性は『環境世界と自己の身体との交感能力』であり、また同時にその適切性について把握する能力である。要するに、空間と身体とを統括的に捉える能力である。」と説き、さらに「近代科学はできるかぎり人間と環境とのかわりを認識から排除することによって、認識の『客観性』や『普遍妥当性』を確保しようとしてきた。客観性や普遍妥当性を確保することは、ひとりよがりの感性的認識の個別性から離れることによって、だれにでも説得力をもつことを目的としたものであった。しかし、感性的認識に含まれる個別性の意義を捨て去ることは、感性の重要性を見失うことであり、また感性的認識を失うことは、世界とのむすびつきを失うリスクをも意味したのである。」と論じている。

このように考えると、竹林征三による「風土工学」の提唱もこの系譜の一環と考えられるだろう。

これまでの土木工学では自然的風土についてはまだしも、その土地の人々が保持したいと願う伝統や歴史、土地に刻まれた情念や人々の感性など、社会的風土に対する顧慮は希薄であったから、土木技術者の知識と力を尽くした折角の努力の結果も、必ずしも社会から好感をもって受容されるとは限らなかった。土木技術の旗手たらしめる建設コンサルタントは、このような社会的評価基準の変化の動向を的確に把握して、常時にその意識改革を持続すべきである。